研究論文

坂口安吾と日蓮聖人：「肝臓先生」を中心に

岡田文弘

一、はじめに

日蓮と関わりのある近代文学者といえば、宮澤賢治（一八九六―一九三三）や高山樗牛（一八七一―一九〇二）等の名が真っ先に連想されよう。しかし本稿では、一見意外な人選に思われるだろう、坂口安吾（一九〇六―一九五五）と日蓮信仰との関わりを見ていくものである。

その題材としては、安吾の小説「肝臓先生」を取り上げる。同作についての先行研究としては押野［二〇〇九］一九七―二一一頁が挙げられるが、しかし同論文が指摘するようにこの作については「解説や解題といった短いものばかりで、本格的な作品論がないのが現状である」（一九七頁）。なおその例外として黒崎［一九九八］があるが、それでもなお同作を扱う研究が少ないことに変わりはない。

これまであまり顧みられることのなかったであろう、安吾と日蓮との関連。そして、埋もれた傑作「肝臓先生」……そこに本稿は改めて光を当てんとする試みである。

二、坂口安吾と仏教

坂口安吾は新潟県に生まれ、東洋大学印度哲学科を卒業した。ファルス「風博士」で注目され、文壇に進出。戦後は「堕落論」「白痴」等によって社会に衝撃を与え、文学史上確固たる地位を築く。太宰治（一九〇九―一九四八）、石川淳（一八九九―一九八七）、織田作之助（一九一三―一九四七）らと共に「無頼派」と呼ばれた。その作品は純文学のみならず推理小説、ルポ物、歴史物、エッセイなど幅広いジャンルに及んだ……大体このようなプロフィールだが、ここで目を引くのは「東洋大学印度哲学科卒」という経歴である。

実は、若き日の安吾は仏道を志し、猛勉強の日々を送っていたのだ。その研鑽の様子は、彼の「勉強記」「風人録」「二十一」「風と光と二十の私と」といった作品で触れられている。[1] こうした仏教の研鑽と彼の文学との関わりについては看過すべからざるものがあり、「安吾文学は、仏教をしてその成立の構造にかかえもった、近代文学ではめずらしい文学であったことは、明確にとらえられなければならない」（竹内［一九九三］四二頁下）との指摘もある。

また、同様に仏教をバック・ボーンとした近代文学者である高橋新吉（一九〇一―一九八七）は、安吾について「彼は無宗教であったというよりも、りっぱな仏教徒であったように筆者は思っている……彼は仏教や禅を表面に出さないで、身をもって実践したといえるのである」（高橋［一九七〇］三三―三六頁）と述べている（なお付言すると、この高橋［一九七〇］は「肝臓先生」にも言及しており、「これは集中でも傑作である。将来日本文学の古典として、長く読み次がるべき作品だと筆者は思った」（三五頁）と絶賛している）。

このように仏教と深い関わりを持つ安吾だが、とはいえその作品においては、日蓮への言及は少ないのが実情である。しかしここで注目したいのが、彼が壮年の頃に伊東の地に滞在していたという事実だ。

三、坂口安吾（そして日蓮）と伊東

安吾は昭和二十四（一九四九）年からの約二年間を、静岡県伊東市で過ごしている。くだんの「肝臓先生」も、この伊東滞在の時期に執筆されている。

彼の伊東への移住から「肝臓先生」執筆に至るまでの生活を、ここで概観しておこう。[2]

昭和二十四（一九四九）年：四十三歳

・八月二十日頃、伊東の古旅館に滞在（その後、秦邸→石原別居へ転居）

・九月、芥川賞選考委員に推される。

・十月、「我が精神の周囲」を『群像』に発表。

（・十一月頃、「肝臓先生」執筆か[3]）

・十二月、間借り生活を止め、市岡区広野の借家に移る。

昭和二十五（一九五〇）年：四十四歳

・一月、伊東市の開業医・佐藤清一をモデルにした「肝臓先生」を『文学界』に発表。

ここで留意したいのは、伊東は日蓮にゆかりある地でもあるという点だ。日蓮は弘長元（一二六一）年五月十二日から弘長三（一二六三）年二月二十二日まで、伊東の地へ流罪となっていた。所謂四大法難のうちの一つ、「伊豆法難」である。

日蓮の伊東での暮らしぶりを伝える逸話のうち、よく知られたものは往々にして（真偽未決遺文ではあるが）『船

守弥三郎許御書』によくまとまっている。[4] すなわち、同書の題号にその名が採られている強信者・船守弥三郎の帰依を受ける。そして、当初は敵視されていた当地の地頭・伊東八郎左衛門の病気平癒のため祈祷を行い、見事これに成功する。そして海中より出現したという、立像釈迦仏を献上される……といった次第である。この伊東の地で日蓮は思索を深め、よく知られた遺文である『四恩鈔』『教機時国鈔』を著述している。後者は日蓮独自の教判である五義（五綱）を明かし、また後期に顕著となる真言批判の嚆矢ともなった重要な遺文である（ただし『四恩鈔』『教機時国鈔』ともに真蹟はないが）。

このように伊豆法難は幕府による流罪という不当な理由によるものとはいえ、その地での滞在自体は彼に信者の獲得や教学の深化をもたらす、実りの多いものだった。そんな日蓮ゆかりの伊東の地ゆえに、安吾の伊東滞在記「我が精神の周囲」（一九四九年）にも、日蓮信仰のかけらが見られる。同作から、『人生劇場』で知られる小説家・尾崎士郎（一八九八―一九六四）に勧められて温灸を試みるくだりを以下に見てみよう。

「私はさッそく、その翌日から、この温灸を試みた。さる婆さんが、やっているのである。四十前後の二人の中年婦人のお弟子を従えて現れるのである。」

「ポンポンとタンカをきるこの弟子は、むかしは生長の家の信者であったという。師匠はこの弟子を「火の玉」とよんでいた。もう一人は温灸をやりながらアンマをとる婆さん弟子で、昔は日蓮の信者だという。この方はおとなしかった。」

「朝は日蓮の婆さんが肝臓をやり、夜分は師匠と火の玉が睡るための温灸をやりにくる。日蓮の婆さんは温和で、気違いじみたところや、宣伝めいたところがなく……当然なことをマジメに言う。ハッタリ漫才の二人組とは逆なことを言うのである。」

「一時間ほどすぎて、日蓮の婆さんを差し向けてよこした。この婆さんの方に私が好意を持っていることを嗅ぎだしたからであろう。」

（安全八、二七八―二八一頁）

このように「我が精神の周囲」には、「日蓮の婆さん」と安吾が呼ぶところの温灸士、「肝臓の治療をする日蓮信者」が登場し、相当好意的に描かれている。そして同作発表の翌年、ひき続き「肝臓先生」が発表されるのである。

四、「肝臓先生」概要

「肝臓先生」は昭和二十五（一九五〇）年、『文学界』に発表された。章立てはないが★マークで区切られ、五部構成になっている。本稿では便宜上【一】～【五】とナンバリングする。

まず粗筋を掲げておく。

【一】 終戦後二年目の八月十五日。《私》は彫刻家のQに招待されて伊東を訪れる。出迎えたQは《私》をアトリエに案内し、肝臓をかたどったという異様な石像を見せる。その石像は、伊東の英雄である医学士・赤城風雨（通称「肝臓先生」）の顕彰碑だという。Qは、石像に添える詩を作ってほしいと《私》に依頼する。《私》は、肝臓先生を崇拝する漁師・烏賊虎さんの家に連れて行かれ、肝臓先生の一代記を聞くことになる。

（以下、烏賊虎さんの語り）

【二】 町医者の赤城先生は、戦争がはじまって昭和十二年末頃から、患者に肝臓の腫れた者が激増していることに気がついた。はじめは戸惑っていた先生だが、これは流行性の肝臓炎に違いないと確信し、その原因究明と治療のための研究に没頭するようになる。ひたすら患者を肝臓炎と診断する先生は、いつしか「肝臓先生」と呼ばれる

ようになった。

【三】 肝臓炎とばかり診断していて冷笑される、しかし実際のところ、診る患者はことごとく肝臓炎……懊悩していた肝臓先生は、恩師の謝恩会に出席する。その席上の挨拶で、伊東での肝臓炎流行の可能性について述べたところ、他の出席者たちから思わぬ支持と激励を受け、勇気づけられる。

【四】 一本気な肝臓先生は、県の保健課や軍部ともしばしば衝突するが、意に介さない。そんなある日、離れ小島からやって来た娘が、父の病気を見て欲しいと往診を依頼する。娘、肝臓先生、私（烏賊虎さん）は小舟に乗り込み出発するが、途中で敵機に爆撃される。娘と私は無事だったが、先生は見つからなかった。

（ここで烏賊虎さんの回想は終了）

【五】 烏賊虎さんの話に感銘を受けた《私》は、顕彰碑のための詩を書き上げる。その詩が末尾に載せられる。

以下、考察に移る。

五、肝臓先生と日蓮聖人

まず【三】における、謝恩会での肝臓先生の挨拶から見てみたい。

「頼朝が流され日蓮が流された離れ小島のようなこの町にも、戦争以来、温泉療養所ができまして、あたかも当物療科の延長の感があり、そこの諸先生方と親しくしていただきまして、まるで医局にいるような気分にひたり、心からうれしい日夜をすごさせていただいております。」

（安全八、三三五―三三六頁）

この謝恩会席上での源頼朝・日蓮への言及は、モデルとなった佐藤清一氏が実際になしたものらしい（佐藤［一九七〇］一四頁）。佐藤氏は「年少頼朝が全国に旗挙げしたのにもこの町は関係があった。日蓮上人が天下に呼号したのにもこの町は関係があった。このおれは、この町から、肝臓炎の真相を天下に発表せねばならないような運命にきまっているとでもいうのか。」（佐藤［一九七〇］七頁）との気概を持って医療に臨み、その思いを謝恩会で吐露していたのである。[5]

モデルたる佐藤氏自身が日蓮を範としており、そして彼の人生はそこかしこに日蓮を思わせる要素があった。安吾はこれに取材することで、いかにも日蓮を思わせるキャラクター「肝臓先生」を描き出している。

まず【二】において、肝臓先生はひたすら肝臓炎一本の診断を下していく。これは日蓮がひたすら題目一本を布教していた姿勢を想起させる。更に、その一本槍の診断／布教に対し、それへの周囲からの冷笑・無理解に曝される点（【三】）も、肝臓先生と日蓮とは一致している。そして結果として国家の弾圧を招きこれと対決するところまで、両者は酷似している。肝臓先生は【四】において、『立正安国論』奏上よろしく県保健課に投書し、平頼綱との謁見よろしく軍医部長に持論をぶつけるのである。

こうした肝臓先生の軌跡は、日蓮が『諫暁八幡抄』において「ただ題目南無妙法蓮華経を広めようとしていた。そのことで不軽菩薩のような難に遭うだろうが、しかし流布は必至だった。しかし更に国主にまで弾圧された。」（「只妙法蓮華経の七字五字を日本国の一切衆生の口に入とはげむ計也。……只不軽のごとく大難には値とも、流布せん事疑なかるべきに、真言・禅・念仏者等の讒奏に依て無智の国主等留難をなす。」定遺一八四四頁）と回顧したところの、その生涯に重なるのである。

付言すると、前述のように、安吾は前年執筆の「我が精神の周囲」では《肝臓を治療する「日蓮の婆さん」》を描いていた。このモチーフが、さらに佐藤清一医師という題材を得て《肝臓を治療する［日蓮的な］医師》の造形へと

発展したのではなかろうか。すなわち、《肝臓を治療する［日蓮的］人物》モチーフの継承が、そこに見られるのである。

六、宮沢賢治と肝臓先生

前節では、肝臓先生というキャラクターと日蓮との類似について指摘したが、その中で筆者は日蓮の『諫暁八幡抄』の一節を引いた。そこには不軽菩薩の名が挙げられていたが、この不軽菩薩という呼び名は「不敢軽慢」（あなたを軽んじない）と繰り返すばかりのその姿を他人から揶揄された一種の蔑称である（『法華経』常不軽菩薩品第二十　大正九、五一上一・三）。そして「肝臓先生」という呼称も「町の人々が先生を肝臓医者とさげすむ」というように、これまた他人からの揶揄の産物であった。

そしてその「不軽菩薩」に触発されて、熱心な日蓮信仰者として知られる宮澤賢治（一八九六―一九三三）の代表作「雨ニモマケズ」が生まれたことも周知の事実である。ここで【二】の冒頭の文を引いてみたい。

「汝は何者であるか、ときかれると、さしずめ、人々が肝臓医者さと答えてくれるところを、先生は、余は足の医者である、と答えるのである。町医者というものは、風ニモマケズ、雨ニモマケズ、常に歩いて疲れを知らぬ足そのものでなければならぬ。」

（安全八、三二九頁）

このように安吾は、肝臓先生の人物像を「雨ニモマケズ」を引いて描写しているのである。[6] 安吾は肝臓先生を描くため、日蓮のみならず、日蓮の精神を現代に蘇生させる宮澤賢治の「雨ニモマケズ」を援用していると言えよう。なお付言すると、安吾は日蓮や『法華経』に傾倒したとは述べていないが、賢治については絶賛評価していたのであ

る（「教祖の文学」[7]）。

七、肝臓先生の殉死をめぐって：西川満『生死の海』との類似

更に【四】における、肝臓先生の殉職の場面を見てみよう。

「島に病人が待っています。行ってやらなければなりません。あなただけは、それを喜んで下さるでしょう。肝臓医者は負けじ」／深く深く一礼を残すと、あとはイダテン走りであった。病院へ駈けつけると薬をつめたカバンをとり、私をしたがえて、一散に海へ。／三人は小舟に乗った。私は櫂をにぎった。海上で、かなた陸上の空襲のサイレンをきく。それは淋しく、怖ろしいものである。見渡す海に、一艘の舟とてもない。浜に立つ人影もない。／風よ。浪よ。舟をはこべ。島よ。近づけ。／……爆音がきこえた。にわかに、ちかづいた。こっちへ来る！／アッと思った瞬間に、私は施す術すべもなく、ただ、すくんで、待つばかりであった。／「伏せ！　伏せ！」／先生は叫んだ。伏すことのできない私を、怒りをこめて、にらんだ。その先生は伏さなかった。／飛行機は私たちの舟をめがけて急降下する。先生はそれをジッとにらんでいる。耳を聾する爆音。すべてが、メチャくにひっくりかえった。／気がついたとき、私は海上を漂っていた。かたわらに、小舟が真二ツにわれている。娘が歯をくいしばって、浮いている。しかし、先生の姿はなかった。／そして先生の姿は永久に消え、再び見ることができなかった。遺品の一つといえども、浜に打ちあげられてこなかったのだ。（安全八、三四五―三四六頁）

このように肝臓先生は敵機の襲撃により、海上で非業の死を遂げる。ここで問題となるのが、肝臓先生のモデルである佐藤清一医師が、戦後も存命だった事実である。つまり、肝臓先生の殉死の場面は、比較的忠実な「モデル小

説」であった本作においては注目すべき、安吾による「創作」なのだ。[8]

それではなぜ、安吾はかかる創作を行なったのだろうか。ここにも日蓮の影を読みとることもできよう。なんとなれば、『日蓮　殉教の如来使』（田村芳朗著、ＮＨＫ出版、一九七五年）といった題の本が出ていることからも明らかなように、日蓮は「殉教者」というイメージを持たれる場合がある。他ならぬ安吾自身、宣教師たちの殉教を描いた作品「イノチガケ」において、迫害された宣教師を日蓮に比している。[9] こうした殉教者のイメージを、日蓮から肝臓先生に引き継がせたのだろうか……しかし日蓮は実際には殉教していないので、この仮定には問題もあろう。

ここで筆者が注目するのが、西川満（一九〇八―一九九九）の手による「生死の海」という小説である。

西川満は日本統治時代の台湾において活躍した文学者である。[10] 三歳の時に一家で台湾に渡り、高校受験を機に一旦帰日、早稲田大学仏文科卒業後に台湾に戻り文筆活動を開始した。台湾日日新報に勤務する一方、台湾文芸家協会を設立し、『文芸台湾』を創刊する。戦後は帰日し、一九四九年、「地獄の谷底」で第二十二回直木賞候補となった。

この西川が一九四四年に発表したのが、殉教した日蓮宗僧侶・岡田栄源（日惺。一八九三―一九四三）の伝記小説、「生死の海」である。

栄源は[11]日蓮宗大学林卒業後、開教師として朝鮮に赴任した後、一九二六年に台湾に移り台北法華寺の住職となった。その後は十七年間に渡って布教を行うが、一九四三年、乗っていた船が台湾其隆の港付近で撃沈され、帰らぬ人となった。この栄源の最期を「生死の海」は次のように描いている。

「十九日も、海はわりにおだやかであつた。／避難の演習を終へて、船室に戻り、戦局について、語り合つてゐる時であつた。もの凄い激動を感じた。／栄源は皆と一緒に二等甲板から眞直にボート甲板に通ずる階段を驅け登つた。魚雷を受けた船はすでにもう傾斜をはじめてゐた。／ボートは間合ひさうもない。／飛び込め、飛び込

めと叫んでゐるものがある。／栄源は救命胴衣を身につけて、泡立つ海中に身を投じた。そして出来るだけ船を離れた……溺れてゐるものをかかへては、そのボードや、流れてゐる筏につかまらせた。／幾人救ひあげたであらう……栄源は、呼びとめる聲を背に、自分からボートを離れていつた。ボートにはあまり餘裕がなかつた。……栄源の高唱する玄題は、暗い海の上を、なほしばらく流れてゐた。／が、やがて風が吹き出すにつれて、はげしい波の音に、その聲は奪はれてしまつた」

（西川、六九―七三頁）

この西川が描いた栄源の最期と、安吾が描く肝臓先生の最期とは、「海上での殉死」という点で、奇妙な類似を見せていないだろうか。

実は「肝臓先生」執筆の時期に、安吾と西川とは奇妙な接近を見せている。そもそも一九四七年の座談会「小説と批評について　文芸座談会」（『新文化』二号、西日本新聞社）において、安吾と同席した林房雄が西川満に言及しているので、[12] 安吾が西川を知らなかった可能性はあり得ない。そして安吾が伊東に移住した一九四九年の七月には、安吾作品（「アンゴウ」）と西川作品（「帖木児の紅玉」）を収録したアンソロジー『日本小説傑作全集1』（宝文館）が刊行されている。さらに同年の下半期に西川は直木賞候補に推されるのだが、一方の安吾は、直木賞と並ぶ芥川賞の選考委員に推されている。そしてこの一九四七年下半期に「肝臓先生」は恐らく執筆され、翌五〇年に発表とあいなるのだ。

状況証拠でしかないものの、安吾の伊東滞在と、西川の中央文壇での躍進時期が重なっており、二人が交差する中で「肝臓先生」が執筆されていることは事実なのである。そこで、安吾が西川の作品「生死の海」を何らかの形で見知っていたとすれば、「肝臓先生」の主人公に日蓮の姿、さらに日蓮の継承者である宮沢賢治の作品（「雨ニモマケズ」）をおり込んだ流れで、西川が「生死の海」で描いた日蓮宗僧（栄源）の像をも投影し、その結果として殉死の

場面が創出された……と想定できるのではなかろうか。

更に付言すれば、「肝臓先生」が「戦時中の文学の《パロディ》」という性質を持っていた点も着目すべきである。押野［二〇〇九］が指摘するように、「肝臓先生」の末尾に置かれた詩は「雨ニモマケズ」のパロディたるのみならず、戦時中に量産された戦争詩のパロディでもあった（二〇一―二〇五頁）。「生死の海」は戦争賛美の文学では無いものの、戦時中の文学であることは確かである。日蓮信仰の文学として、そして戦時中の文学として、「生死の海」が「肝臓先生」の材となった可能性を、ここで指摘しておきたい。

八、まとめ

本稿では、坂口安吾と日蓮信仰との関わりを、小説「肝臓先生」を中心として見てきた。

まず、伊東滞在を機に書かれた「肝臓先生」における日蓮信仰の反映（宮澤賢治「雨ニモマケズ」との関連も含む）を、主として肝臓先生の人物像の造形に注目しながら指摘した。そして、作中で創作が最も著しい殉死の場面については、西川満「生死の海」との関連の可能性を指摘した。

最後に、「肝臓先生」篇中から一文を引いて、本稿の締め括りとしたい。

「真理を知るものは常に孤絶して、イバラの道を歩かねばならないのだ。」（安全八、三四四頁）

（テキスト）

『大正新脩大蔵経』

『昭和定本　日蓮聖人遺文』身延山久遠寺（一九五二―一九五九）→定遺

『坂口安吾全集』第三／五／八、筑摩書房（一九九九／一九九八／一九九八）→安全三／五／八
西川満『生死の海』復刻版、妙興寺（一九九七）→西川

（参考文献）

赤木　孝之［一九八八］「坂口安吾と仏教」『立正大学國語國文』二四、一一二―一一八頁
池内　紀［一九七七］「解説」坂口安吾『肝臓先生』角川文庫、二四八―二五三頁
岡田真美子［二〇一三］「臺北法華寺と岡田日惺（榮源）」『東北亜細亜文化學會第26次国際学術大会論文集』九九―一〇六頁
岡田真美子［二〇一四］「三大誓願と岡田日惺」『日蓮宗勧学院報』一七、三五―四二頁
押野　武志［二〇〇九］『文学の権能　漱石・賢治・安吾の系譜』翰林書房
黒崎　力弥［一九九八］「肝臓先生論Farceの一貫性」『東洋大学大学院紀要（文学研究科）』三五、八五―九七頁
坂口安吾研究会［二〇一四］『安吾からの挑戦状』ゆまに書房
佐藤　十雨［一九七〇］『増補改訂　肝臓先生』八木書店
関井　光男［一九六八］「解題　肝臓先生」『定本　坂口安吾全集』第四巻、冬樹社、五七七頁下―五七八頁下
関井　光男［一九九一］「坂口安吾年譜」『坂口安吾全集』一八、ちくま文庫、七四九頁上―七七〇頁上
高橋　新吉［一九七〇］「禅と文学」『禅と文学』宝文館出版
竹内　清己［一九九三］「坂口安吾と仏教」『国文学：解釈と鑑賞』五八（二）三七―四二頁
王　頂倨［二〇一一］「戦前期に発行した小説から考える、台湾文学史における西川満の位置づけ」『東アジア文化交渉研究』四、六五―七七頁
和泉　司［二〇〇八］「〈引揚〉後の植民地文学：一九四〇年代後半の西川満を中心に」『藝文研究』九四、六三―八一頁

※引用文の傍線はすべて筆者による。

1　竹内［一九九三］三九頁上―下。
2　関井［一九九一］七六四頁下―七六五頁上。
3　関井［一九六八］五七八頁上。
4　「日蓮去五月十二日流罪の時、その津につきて候しに、いまだ名をもきゝをよびまいらせず候ところに、船よりあがりくるしみ候きところに、ねんごろにあたらせ給候し事はいかなる宿習なるらん。過去に法華経の行者にてわたらせ給へるが、今末法にふなもりの弥三郎と生れかわりて日蓮をあわれみ給か。……ことに当地頭の病悩について、祈せい申べきよし仰候し間、案にあつかひ（扱）て候。然れども一分信仰の心を日蓮に出し給へば、法華経へそせうとこそをもひ候へ。……ついに病悩なをり、海中いろくづの中より出現の仏体を日蓮にたまわる事、此病悩のゆへなり。」（定遺二二九―二三〇頁）
5　なお安吾は頼朝についての小説も書いている：「安吾史譚　源頼朝」（一九五二）
6　黒崎［一九九八］は、肝臓先生の本名である「赤城風雨」について、モデル佐藤清一氏の俳号「十雨」をその由来と見つつも、「他に、宮澤賢治の最も有名な詩「雨ニモマケズ」の一節からきている」（八八頁上）とし、「教祖の文学」に言及しつつ、「風雨の名前の他に行動パターンや作品の要所要所に賢治の詩の影響が見られるのは、賢治の詩に対する安吾の思いが表れてしまったのだろう」（九〇頁上）とする。なお押野［二〇〇九］は本作について「この小説は、単純に肝臓先生のひたむきな生き方を称賛しているわけではないことは、一目瞭然である」（二〇七頁）とした上で、本作における宮澤賢治「雨ニモマケズ」の取り入れ方を論じている。同論文は、作品末尾に置かれた、肝臓先生を讃える詩について、それが「雨ニモマケズ」と戦争詩のパロディとなっている点を指摘する（二〇一―二〇五頁）。更に、（a）賢治の奉じた日蓮主義が国体論に接近していた点（b）戦前、石原莞爾が満洲における農本主義政策を進める際に「雨ニモマケズ」を利用した点（c）戦後、国定教科書に「雨ニモマケズ」が収載される際、作中の「一日玄米四合」が三合に改竄された点（当時の配給が一日二・五合だったため）などを挙げることで「戦前から戦後へとその時代の願望に応じて……「雨ニモマケズ」礼讃」（二〇七頁）が続けられてきたという、「雨ニモマケズ」という美談の「歴史化」の過程を浮き彫りにし（二〇五―二〇七頁）、「こ

の小説は、愛国者である肝臓先生の歴史的美談を、「雨ニモマケズ」を過剰に反復、消費しつつ語ることで、戦時下における「雨ニモマケズ」のイデオロギー性を脱臼させ……パロディという戦略を通して、美談が歴史化される一歩手前で、「人間」とは何かを問い続けている」と結論づけている（二一一頁）。

本作が単なる「雨ニモマケズ」の礼讃でないことは筆者も首肯するところである。ただし単純な否定でもないわけで、つまり単純な賛否の表明ではなく、「パロディ」「ファルス」という諧謔の技法に帰結しているのである。安吾は賢治の文学を「本当に人の心を動かすもの」（『教祖の文学』安全五、二四一頁）として高く評価しつつも、それが内包する危険性も熟知し、またその美が悪用され消費されることへの嫌悪・苛立ちも抱きつつ、いわばその愛憎なかばする思いが、諧謔の表現に昇華されているのではなかろうか。

7 「私は然し小林（筆者注：小林秀雄）の鑑定書など全然信用してやしないのだ。西行や実朝の歌や徒然草が何物なのか。三流品だ。私はちつとも面白くない。私も一つ見本をださう。これはたゞ素朴きはまる詩にすぎないが、私は然し西行や実朝の歌、徒然草よりもはるかに好きだ。宮沢賢治の「眼にて言ふ」といふ遺稿だ。」「本当に人の心を動かすものは、毒に当てられた奴、罰の当つた奴でなければ、書けないものだ。思想や意見によつて動かされるといふことのない見えすぎる目などには、宮沢賢治の見た青ぞらやすきとほつた風などは見ることができないのである。」（安全五、二三九―二四一頁）

8 「肝臓先生の死は虚構なのである」（関井［一九六八］五七八頁上）「佐藤清一が死去したのは平成三年のことだから……孤島で肝臓を病んでいる病人を救うため、小舟で移動中攻撃を受けて肝臓先生が海の藻屑と消えていく場面もフィクションである」（黒崎［一九九八］八七頁下）。なお池内［一九七七］二五二―二五三頁は、この肝臓先生の死を自作「風博士」の結末（主人公が風となって失踪する）のセルフ・パロディと解釈している。

9 「日蓮が大きな迫害を受けたのは、彼自らが他宗を非難したからであり、基督教の布教でも、仏僧に宗論を吹かけ、仏僧の堕落を難じ、事毎に異端に向つて敵対を示さなければ、彼等の受けた迫害も尠かつたに相違ない。」（安全三、一六四頁）

10 以下の西川の略歴は和泉［二〇〇八］・王［二〇一一］参考。

11 栄源の略歴は岡田［二〇一三］参考。

12　坂口安吾研究会［二〇〇四］一五八頁上。